所」でもある．

錦繍中華では歴史的，伝統的コラージュからなる古代中国の伝統空間，つまり社会主義と資本主義との分断を思わせない世界のあらゆる場所に生きる中華人が誇りに思えるような「美しい中華」像が描かれている．民俗文化村では，周縁化された少数民族の文化表象に多数派国民のまなざしを向けることによって，中華民族という「国家」による統一国家でありつつ「多民族国家」であるという固有の中国像はより鮮明な対象として構築されている．深圳民俗文化村の少数民族の演者たちは国家メディアによって作り出された客体化のまなざしに対するダイナミックな受容－対抗のプロセス（自らの他者化された表象を再構築していく過程において）を生み出す契機にもなる「戦術」を実践している．テーマパークという空間では，国家の表象や観光事業の促進などさまざまな目的で，少数民族の宗教や文化がスペクタクル（見せ物）化され，商品化されている．しかしそれは一方的な過程（空間的実践）ではない．その中ではステレオタイプ化（他者化）されたイメージが観光客によって消費され再生産されるだけでなく，観光客に眼差される側が時には行為主体ともなるのである．

深圳華僑城のテーマパーク空間は，資本や権力，専門家による「空間の表象」であると同時に，「表象の空間」でもある．深圳市政府から都市計画の権限を取得し，有名な都市計画者を雇い，自らの敷地内の空間を計画建設することは華僑城という空間の実践主体にとって「空間の表象」である．しかし同時に，テーマパークという観光客に向けた空間の中に，錦繍中華というような中国の国家像を表象する空間を構築することは，輸出主導の工業開発が主流の当時の深圳の都市開発環境の中で，人々の想像力に働きかける「表象の空間」を提示することだったともいえる．このように「空間の表象」を作り出す側が，人々の「表象の空間」を利用し動員するという空間的実践はつねに存在する．深圳の華僑城設立以降，現に中国各地で複製されているテーマパークや遊園地や観光施設は，その多くが華僑城の開発モデルを援用している．深圳は現実に先端的な経済活動が展開される（現代的）都市空間であると同時に，現代性を象徴する記号的な空間でもある．深圳という都市そのものが，いわば一つのテーマパークのような存在であり，そのテーマ（記号）が，「グローバル化」（の展開）であり，中国の改革開放経済の成功（社会主義体制と市場資本主義的経済様式との「接合」）という物語なのである．

このように「空間の表象」と「表象の空間」はけっして二項対立的なものでも固定的なものでもない．深圳の華僑城の都市社会空間は，社会主義の中国政府による経済のグローバル化と国民国家の政治的アイデンティティへの追求の下での空間的実践と，それを規定する観念やイデオロギー（「空間の表象」）の産物である．同時に，テーマパークという観光空間およびポストモダンの都市空間は，人々の想像力に根ざす「表象の空間」を先取りして利用するという性格を合わせ持っている．しかしその中で，まなざしを向けられる少数民族の演者たちは，自らのパフォーマンスを創造し，民俗村の規範を逸脱することで抵抗を試みる主体でもあり，その空間は日常実践の中で再生産される「生きられる空間」（「表象の空間」）でもある．このように「空間の表象」と「表象の空間」は，空間の実践において相互浸透し合うものである．

（主指導教員：熊谷　圭知）

**カウラ事件（1944年）の研究－捕虜の日々を生きた日本兵たちの「日常」からの再考察－（英題：Reconsidering the Cowra breakout of 1944: From the viewpoints of survived Japanese prisoners of war and their “everyday lives” in the Camp）**

**山田　真美（YAMADA Mami）**

**論文構成**

プロローグ（カウラ事件70周年記念式典）

序章　研究目的と先行研究の検討

1．カウラ事件とは何か

2．筆者とカウラ事件の関わり

3．日本兵と日本兵捕虜に関する先行研究の検討

4．研究の目的と方法

1）研究の目的

2）研究の方法

Ⅰ　第二次世界大戦と旧日本軍

1．日本の近代化と軍隊化する身体

2．私的制裁と絶対服従

1）内務班

2）私的制裁に関する元日本兵の回想

3．旧日本軍の捕虜政策

1）日清戦争から第一次世界大戦期の捕虜政策

2）第二次世界大戦期の捕虜政策

（A）空閑少佐の自決

（B）ジュネーブ条約不批准

（C）日中戦争に於ける中国人捕虜政策

（D）『戦陣訓』と『俘虜ニ関スル教訓』

（E）士官に対する国際法教育の縮小と廃止

（F）「準用」をめぐる齟齬と連合国からの抗議

（G）ポツダム宣言と捕虜虐待

3）第二次世界大戦期の日本人捕虜発生状況
Ⅱ　オーストラリアの捕虜政策
1．白豪主義と日豪関係
2．オーストラリアの民間人強制収容
3．オーストラリアの捕虜政策
4．日本軍に捕えられたオーストラリア人捕虜
Ⅲ　Ｂキャンプの日本兵捕虜とは誰だったのか
1．日本兵捕虜名簿の整備
2．初期（1942年）に捕えられた日本兵捕虜
1）特徴
2）生き残った捕虜（Ｕ・Ｎ）の回想
3．中期（1943年）に捕えられた日本兵捕虜
1）特徴
2）生き残った捕虜（Ｚ・Ｎ）の回想
4．後期（1944年）に捕えられた日本兵捕虜
1）特徴
2）生き残った捕虜（Ｎ・Ｗ）の回想
3）生き残った捕虜（Ｊ・Ｚ）の回想
4）生き残った捕虜（Ｕ・Ｔ）の回想
5．Ｂキャンプの日本兵捕虜の特徴
1）死亡時の年齢
2）出身地
3）日本に於ける職業
4）身長体重とＢＭＩ
5）マラリア感染率
6）カウラ事件に於ける死因
7）Ｄキャンプの士官捕虜との比較
8）ニューギニアに於ける飢餓体験
Ⅳ　カウラ第12戦争捕虜収容所Ｂキャンプの日常
1．Ｂキャンプという場所
2．衣服と男性性
1）西洋式衣類の支給
2）褌と日本男児
3．捕虜の身体をめぐるまなざし
4．女形の発生
5．男同士の同衾
6．男同士のホモソーシャルな絆
7．Ｄキャンプとの関係
8．隔離されたハンセン病の捕虜
Ⅴ　生存者の言葉で再現するカウラ事件
1．事件発生直前のＢキャンプの様子
2．事件発生までの経緯
1）班長会議
2）○×（まるばつ）投票
3．酒・煙草が身体にもたらした影響の可能性
1）密造酒「カウラ正宗」
2）事件前の煙草の配給停止
4．元捕虜達が回想するカウラ事件
1）首吊り縄を用意した捕虜の回想
2）官吏出身の軍属捕虜の回想
3）数日にわたって脱走した捕虜の回想
4）「事務所」に勤務した捕虜の回想
5）ハンセン病で隔離された捕虜の回想
Ⅵ　カウラ事件直後の様子
1．231体の遺体の埋葬
2．可浦キャンプ事件理由書
Ⅶ　カウラ事件後の日本兵捕虜
1．収容所の移動
1）移動まで
2）ヘイ第８戦争捕虜収容所への移動
3）マーチソン第13戦争捕虜収容所への移動
2．男らしさの脱構築
1）「大和一座」の旗揚げ
2）廃物を利用した物作り
3．敗戦と帰国
1）玉音放送
2）復員船
Ⅷ　元日本兵捕虜達の戦後
1．豪州カウラ会の設立
1）豪州カウラ会設立の趣旨
2）豪州カウラ会会員による活動内容
3）豪州カウラ会会員とは誰だったのか
（Ａ）歴代会長の詳細
（Ｂ）一般会員の詳細
2．Ｄキャンプの日本人士官捕虜とマーチソン会
3．日本人捕虜達の比較
4．妻の視点で見た元捕虜
終章　カウラ事件と元捕虜達の絆
エピローグ


**論文要旨**


本論文は，第二次世界大戦中の1944年８月５日にオーストラリアのカウラ第12戦争捕虜収容所Ｂキャンプで勃発した最大で1,104人の日本兵捕虜による集団自決的暴動（カウラ事件）を，事件に関与した日本兵たちの「日常」と「身体」から再考察した研究である．第二次世界大戦期，日本は物質面で著しく連合国に劣った．みずからの長所を物質以外のところに求める必要から，精神論に重きを置き，身体性や物質性を軽んじた．戦後に行なわれたカウラ事件研究も『戦陣訓』など精神論に基づい

たものが多く，兵士の日常や身体について掘り下げた研究は極めて少ない．本論文ではカウラ事件に関係した日本兵たちの身体・物質面に着目し，軍隊から戦場，捕虜収容所へと居場所が移り変わる過程で彼らが体験した外的要因による身体変化と，それらの変化が彼らに与えた影響とを検証する作業を通じて事件の意味を考察した．

筆者が20年以上にわたって行なった元捕虜たちへのインタビューからは，軍隊と戦場で激しい暴力，疾病，究極の飢餓を日常とした彼らが,捕虜となったことで一転,国際条約に守られた収容所で時間と食糧を持て余し，煙草と密造酒と博打に明け暮れる新しい日常の中で大きな葛藤を体験したことが明らかとなった．また，捕虜たちが女形を演じてみずから熱狂した様子や，男同士の同衾の事実,「褌から洋式パンツ」に象徴される外的要因の変化により彼らのジェンダー観に大きな変化が生じたことも示された．さらに，カウラ事件に関係した日本人将兵を「カウラ事件による死亡者」(231人),「士官捕虜」(18人),「豪州カウラ会会員」(138人）の３グループに分類し，全員の健康状態や身長体重その他のデータをリスト化した結果からは，グループによって健康状態に少なからぬ差があったこと(例えば「カウラ事件による死亡者」のマラリア罹患率は他の２グループに比べ群を抜いて高い),「豪州カウラ会会員」の３人に１人までがカウラ事件を実際に経験していないにもかかわらず戦後は事件のスポークスマンとして活動したこと等が明らかになった．

カウラ事件は，日本兵たちの日常と非日常が幾度も激しく入れ替わり，彼らの身体がほとんど限界を超える変化に連続してさらされ続け，その結果として大きな葛藤が生じた果てに起こった出来事であった．

（主指導教員：熊谷　圭知）